

令和5年度
インクルーシブ教育実践研究校 A
特別支援教育コーディネーター
実践事例パンフレット



広島市立矢野西小学校

はじめに

特別支援教育コーディネーターの主な仕事の一つとして、担任とともに「困り感」をもっている子どもたちの実態把握をし、支援方法を考えていくことが挙げられます。

本校では、①担任による実態把握シートの記入、②特別支援教育コーディネーターによる授業観察、③全児童へ「学級集団アセスメント Q-U」の実施、④ケース会議の開催、⑤学習サポーターとの情報共有、⑥教育相談（保護者との連携）で実態を把握しています。

大切なのは、実態把握を複数の目で、様々な視点で行うことです。本校では、低学年から交換授業を行っていることもあり、まずは担任だけでなく学年で実態把握を行うことができます。複数の人で見ながら、いろいろな状況・場面での行動の傾向を把握するとともに、学級集団アセスメントQ-Uや発達検査等の結果も踏まえながら子どもの姿を捉えています。

特別支援教育コーディネーターが授業観察で子どもの実態を把握する際には、課題だけでなく、できていることも把握し、支援の手掛かりとしていきます。好きなことやできていることが支援のヒントとなることがあります。

また、子どもの行動の背景を考えていく際には、①特性の知識をもっておくこと②その行動の前後の状況、周りの状況も把握すること③今までの情報を総合的に踏まえ、想像力を膨らませること④本人に聞くこと、これら4つを丁寧に行うことで、より正確な実態把握につながると感じています。

子どもの様子から行動の背景を探り、ケース会議等で支援や役割分担を検討し、支援を実行しながら数週間様子を見て、うまくいかなければ、再度支援を検討し直すというP→D→C→Aの流れで対応しています。行動の背景が大きくずれていなければ、支援を検討するだけでいいので、できるだけ正確な実態把握が大切となります。ただ、子どもの様子は成長や環境の変化とともに変わるので、様子に合わせて支援の見直しは必要になります。成長とともに支援が必要なくなったり、違った支援が必要になったりと、子どもの様子に合わせて柔軟に対応していく必要があります。

このパンフレットでは、「セルフコントロールが難しい子」「集団の中で学習することが難しい子」「読み書きが難しい子」への具体的事例を紹介します。特別支援教育コーディネーターとして、どのような動きをとっていたのかについても載せていますので、参考になりましたら幸いです。

事例Ⅰ セルフコントロールが難しい子への取組

1 子どもの様子

- ① 自分の思いを相手が理解してくれないときに、人や物にあたってしまうことがある。友達や先生が好きで自らかかわろうとする。
- ② 予定の変更やいつもと違うことがあると立ち歩くなど落ち着かなくなる。
- ③ 国語、算数などの学習に取り組もうとしない。工作や図鑑を見るのが好きで、興味がある魚や惑星等についてはとても詳しい。
- ④ 集団活動が苦手で、大人数の活動は参加が難しい。1対1や2、3人の少人数だと活動できる。

2 行動の背景の分析（行動観察、発達検査等の結果より）

- ① 他者に対する思いや情動の変化を言葉で表現することが難しい。
- ② 見通しがもちにくく、不安が強い。自分の思っていた見通しと違うと、折り合いをつけることが難しい。
- ③ 完璧主義で、分からないことがあると気持ちが不安定になり、立て直すのに時間がかかる。書くことが苦手である。
- ④ 感覚の過敏さから疲れやすい。睡眠不足等で朝から体調がよくないときは、気持ちが不安定になりやすい。

3 指導・支援の実際

背景	支援
① 言葉で表現することが難しい。	・本児の気持ちをくみとった言葉がけをする。 ・単語で伝えることも許容する。 ・言葉が出そうなときは、焦らずに待つ。 ・言葉で伝えることができたら褒める。
② 見通しがもちにくい。不安が強い。	・一日の時間割や担当教員を机の上に貼って知らせる。 ・1時間ごとの学習の流れを書いて示す。学習の流れはパターン化する。 ・新しい活動や変更があるときは、分かった時点で早めに伝える。不安が強いときは無理をさせず、本児と相談しながら参加できそうな場面で参加する。

背景	支援
③完璧主義で、分からないことがあると気持ちが不安定になる。 書くことが苦手である。	<ul style="list-style-type: none"> ・本児が前向きに取り組める活動を集約し、これをベースに学習内容を計画する。 ・課題の量や内容を調整する。スモールステップで取り組み、「できた!」という経験が積み重ねられるようにする。 ・書字量の調整をする。必要に応じて代筆する。
④感覚の過敏さ等から疲れやすい。	<ul style="list-style-type: none"> ・疲れているときに横になって休める場所を用意しておく。 ・今日の調子を、本児が表情カードを使用して教員に伝え、疲れているときは行動の調整をする。 ・音がしんどいときは、耳栓・イヤーマフを使用する。 ・大人数での活動は刺激が多く疲れやすいので、小集団での活動から慣れるようにする。

※気持ちが高ぶったときに落ち着くための対処法を事前に本児と相談して決め、掲示しておく。

(対処法の例:キーパーソンを呼ぶ。プレイルームに行き、氷や水で手を冷やす。ぬいぐるみをもつ。
好きな本を読む。タブレットで動画を見る。など)

※人や物にあたってしまったときには、クールダウンをした後、本児の思いに寄り添いながら言葉をかけ、どのように行動すればよかったのか、本児と一緒に振り返りをする。

※危険物チェックリストを作り、本児が手に持ちそうなものは置かないようにしたり、鍵がかかるところで管理したりする。

※気持ちの安定のために、家からぬいぐるみや工作本など落ち着いて過ごせるグッズを持参する。

4 子どもの変化と現状

・人や物にあたる回数は大きく減った。

・言葉で伝えたり、伝えようとしていたりする場面が増えてきた。言葉が出てこないときは待つようにし、本児は「えーっと」っとよく言うようになった。「えーとって言うのかっこ悪いよね。」と言う本児に、「えーとって言ってくれたら、思い出そうとしてるってわかるから、先生は待とうって思うよ。もし今思い出せなくても、思い出したら言ってね。」と言うと、「そんなふうに言ってくれたらうれしい。」と言っていた。

・気持ちが不安定になったと分かったときに、「嫌だったね。」「イライラする気持ち分かるよ。」など、まずは本児の気持ちを代弁し、共感することで、気持ちを切り替えることができるようになってきた。しかし、まだ一人でクールダウンすることは難しく、物を蹴ったり、危険物を探したりする様子は引き続き見られる。落ち着くための方法を一緒に模索していったり、学校として危険物の管理を徹底したりしていく必要がある。

・本児と関係が築けている教員でないと、本児の気持ちを予測した言葉掛けが難しいので、今は特定の教員が関わっている。関わる人を徐々に広げていくことが課題である。

5 特別支援教育コーディネーターとして(校内支援体制について)



【実態把握】

担任から子どもへの対応について相談を受け、担任とともに実態把握をしました。まずは、関係づくりが大切なので、休憩時間は子どもと一緒に遊ぶようにし、2週間程度の期間で授業中の様子や給食、掃除時間の様子を見ていきました。担任も毎日子どもの様子について記録を取っていたので、情報を共有し、記録をもとに行動の分析を一緒に行っていました。

関係が築けた頃、手が出てしまう自分についてどう思うか尋ねたところ、「ダメだと思う。変えたい。」と言ったので、担任とともに、気持ちを落ち着けるための方法について、本児を含めて考えていきました。

実態把握をしている中で、子どもの良い姿が見られたときには、すぐに担任に伝え、担任が直接子どもをほめるようにし、担任と良い関係が築けるように配慮しました。

【支援の検討】

支援を検討する際には、担任、学年の先生等に声をかけて複数で行っていました。人や物にあたってしまったときの状況を丁寧に分析するとともに、調子が良いときも合わせて分析していくように提案しました。話し合っただけで決まった支援については、暮会等で全体に報告し、全教職員が同じように関わることができるよう理解を図りました。

【保護者連携】

担任だけで保護者の対応が難しいときは、特別支援教育コーディネーターとして間に入り、保護者と担任と子どもの橋渡しができるように心がけました。担任には、日頃から保護者へ課題だけでなく、良かった姿を伝えるように話をしました。

【関係機関との連携】

SSW や児童相談所等の関係機関との連絡の窓口は管理職が担い、その都度特別支援教育コーディネーターとして担任とともに情報共有しました。関係機関を含めたケース会議等で支援を検討していくときには、「子どものために」という主語を意識し、それぞれの立場でゴールがぶれないように配慮するようにしました。また、担任や SSW とともに本児が通院している病院に行き、学校の様子を伝えたり、支援のアドバイスをもらったりするようにしました。夏休みには、放課後等デイサービスに見学に行き、学校での支援、デイサービスでの様子を担任とともに共有しました。

【個別の教育支援計画等の作成のサポート】

合理的配慮や関係機関が多岐に渡るため、担任とともに個別の教育支援計画を作成しました。作成したものは、担任から保護者に説明をしてもらい、合意形成を得ながら進めていくように配慮しました。

事例2 集団の中で学習することが難しい子への取組

1 子どもの様子

- ①教室に入ろうとしない。入っても授業中は立ち歩きが多く、すぐに教室から出て行ってしまふ。読書やお絵描きは座ってできる。
- ②学習では「意味が分らん。」と言ってやろうとしないときがある。体育や簡単なたしざんなど好きな活動や自信をもってできる学習はやろうとする。
- ③気になるものや人がいると状況は関係なく、そちらに行ってしまふ。

2 行動の背景の分析（行動観察、発達検査等の結果より）

- ①見通しがもちにくい。待ち時間の過ごし方が分からない。
- ②学習内容の理解が難しい。分からないことへの不安が強く、やってみようという気持ちをもちにくい。
- ③視覚刺激を受けやすい。

3 指導・支援の実際

背景	支援
①見通しがもちにくい。待ち時間の過ごし方が分からない。	・1時間でやること、終わりの時間を事前に伝える。 ・待ち時間に読書やお描きなど本児が好きな活動を用意しておく。
②学習内容の理解が難しい。やってみようという気持ちをもちにくい。	・課題を小分けにし、スモールステップで取り組む。「できた!」という経験をたくさん積ませる。 ・本児がつかずきそうな問題や文章題等は、読み上げたり、具体物を使ったりして説明しながら一緒に行う。 ・頑張ることができたら、花丸カードや本児が好きなシールを渡す。
③視覚刺激を受けやすい。	・席を一番前にし、先生や黒板等注目してほしいことに目が向くようにする。 ・必要に応じて机の向きを変えたり、パーテーションを使用したりして、集中できるようにする。 ・気持ちの切り替えが難しいときは、本児が好きな絵本の読み聞かせ等をし、落ち着ける環境にする。

4 子どもの変化と現状

- ・教室で過ごす時間が増えてきた。見通しをもたせること、待ち時間の過ごし方を伝えておくこと、担任が本人の実態を踏まえ、許容する範囲を広げて関わることは効果的であった。
- ・遊びたい気持ちが抑えられず中庭に行ったり、ブロック等をしてしたりして過ごす時間もあるが、タイマーを使って本児と一緒に遊ぶ時間を決めたことで、時間を守って気持ちを切り替えることができるようになってきた。
- ・新しい学習内容では、嫌がることが多いが、学習の流れをパターン化し、スモールステップで取り組みながら、個別の支援を行っていくことで、少しずつできることが増えてきて、自信をつけてきている。
- ・周りからの刺激を受けやすく、個別の対応が必要なことがあるので、学年や学習サポーターと情報を共有しながら継続して支援していく必要がある。

5 特別支援教育コーディネーターとして(校内支援体制について)



【実態把握と保護者連携】

入学当初から教室に入ることが難しかったので、担任とともに実態把握を行っていきました。まずは学校が嫌いな場所にならないように、本児が好きな虫探しを中庭で一緒に行いながら、関係を築いていきました。また、4月末には担任とともに保護者面談をし、家庭での様子を丁寧に聞き取り、家庭で取り組まれている支援を学校でも生かすようにしました。また、学校での様子や行っている支援を伝え、学校と家庭で連携を図りながら協力し合って本児のサポートをしてきたいことを伝えました。

【支援の検討】

支援がうまくいかないときはすぐに支援を検討し直し、臨機応変に対応していきました。日によって本児の様子が変わったので、うまくいく日といかない日の違いは何があるのかなども踏まえて検討していくようにしました。担任が本児の対応をすることが難しいときには、職員室に連絡し、状況に応じて管理職も本児の支援に入るなど、学校全体でサポートしていきました。

【医療連携】

学校の様子が正しく伝わるように、学校の様子を書いたものを保護者に病院に持って行ってもらいました。本児が通っている病院では、学校での困っていることを相談すると、それに対する対応策を提案していただけるので、学校で支援を検討するときに生かしています。定期的に病院に通っているため、学校での様子が変わったとき、支援がうまくいかないときには、書面に記したものを持って行ってもらうことで、医療とも密に連携を図るようにしています。

事例3 読み書きが難しい子への取組

1 子どもの様子

- ①読みとばしたり、読み間違えたりすることがある。逐字読みにはならず、スムーズに読むことができる。
- ②漢字の書き間違いが多い。1・2年生の漢字は読み書きができる。
- ③はさみやものさしが上手に使えない。
- ④字が雑であることが多い。気持ちが整えば、丁寧に書くことができる。

2 行動の背景の分析（行動観察、発達検査等の結果より）

- ①②③④見え方に課題がある。
- ①②④文字の形を識別したり、記憶したりすることが苦手である。
- ②③④手先の不器用さがあり、目と手の協応動作が難しい。
- ②③④書くことへの意欲が低い。注意がそれやすい。

3 指導・支援の実際

背景	支援
①②③④見え方に課題がある。	・文を読むときは、座った姿勢で教科書を置いて指でなぞる。 ・本児が書きやすいノート（補助線がないもの）を使用し、ワークシートには罫線を引く。
①②④文字の形を識別したり、記憶したりすることが苦手である。	・漢字を教えるときには、形を認識しやすくなるように、色を変えて形や線の数に注目できるようにする。 ・読めない漢字は自分でルビを振るようにする。テストはルビが振ってあるものを使用する。 ・漢字テスト以外は平仮名で書くことを認める。 ・漢字テストは選択肢を提示する。
②③④手先の不器用さがある。	・本児が使いやすい鉛筆、定規、コンパス等を使用する。 ・文字の細部の違いは許容する。
②③④書くことへの意欲が低い。注意がそれやすい。	・丁寧に書けていたら褒めるとともに、書こうとするタイミングを見逃さずにほめる。 ・席は黒板に注目しやすいように一番前にする。

4 子どもの変化と現状

- ・指でなぞりながら読むことや、読みが分からない漢字には自分でルビを振ることが定着し、読みとばしや読み間違いは減ってきている。
- ・漢字のテストでは以前はほぼ白紙で出していたが、選択肢があると集中して取り組み、全て記入することができるようになってきている。国語のテストで100点を取りたいと言うなど、意欲が高まってきた。
- ・以前はノートを書く際は、雑な字で書いていたが、丁寧に書くようになってきた。先生や友達、保護者にほめられることが嬉しくて継続できている。
- ・今はタブレットは使用していないが、今後は必要に応じてタブレットの活用についても検討していく必要がある。

5 特別支援教育コーディネーターとして(校内支援体制について)



【実態把握、支援の検討】

担任が記入した実態把握シートに、読み書きの支援について一緒に考えてほしいと訴えがあり、実態を把握していきました。教室での様子を観察するとともに、保護者と本児の同意を得て、学習ルームで個別の学習支援をしながら実態を把握していきました。

本児は話をすることが好きで、自分のこともよく話し、「漢字は何回書いても覚えられない。」「線が2本なのか3本なのか分からない。」と困り感を抱えていたので、どういう支援があれば書けるかなど本児と相談しながら検討していきました。

読むときには、リーディングスリットやバールーペなどを試してみましたが、本児が、指でなぞりながら読むのが一番読みやすいと言ったので、指でなぞりながら読むことにしました。合う方法は一人一人違うので、子どもの感想を確かめながら行うことが大切だと感じました。

本児の実態や支援については校内で共有するとともに、担任には個別の指導計画の作成を助言しました。合理的配慮として明記し、必要な支援を次年度以降も継続できるようにしています。

【保護者連携】

担任とともに学校での様子や支援を伝えていきました。最初は身構えていた保護者も、本児の変容を伝え続ける中で、家庭でできることは何かありませんかと積極的に協力してもらえるようになりました。本児が使いやすい道具も用意して下さっています。学校での子どもの姿を受け入れるまでに時間がかかる保護者もいるので、焦らず保護者の気持ちに寄り添いながら話をしていくようにしています。